

ニュージーランドのニオガイ上科

前朝琉



写真1 ニオガイ科の二枚貝を採集した干潮時の海岸

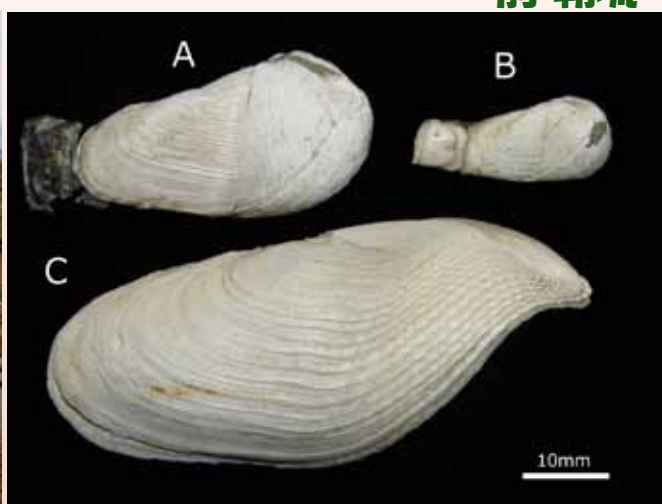


写真2 オークランド周辺のニオガイ科二枚貝。

A: *Pholadidea suteri* Lamy, 1926

B: *Pholadidea tridens* (Gray, 1843)

C: マオリニオガイ *Barnea (Anchomasa) similis* (Gray, 1835)

本誌6月号の静岡県のニオガイ類の記事に引き続き、今回は、ニュージーランドにみられたニオガイ科の二枚貝を紹介します。

ニュージーランドの海岸は、ほとんどが埋め立てられておらず自然の状態に残されており、潮の干満の差が2~3 mほどあるため、干潮時には生きている貝類が多数見られます。私は、オークランドの北にあるファンガパラオア半島の海岸(写真1)の干潮時に露出した泥岩の岩棚で、ニオガイ科二枚貝の和名がない2種類、*Pholadidea suteri*、*Pholadidea tridens* と、唯一和名を持つマオリニオガイ *Barnea similis* の3種類を採集しました(写真2)。採集した個体は、すべて殻のみで、生きている個体は見られませんでした。調べた部分は満潮時にもあまり深くない場所だったので、生息していなかったのかもしれませんが。しかし、その海岸のかなり浅い場所では、いくつかのニオガイ科以外の穿孔貝の生体が複数見つかりました。その穿孔貝の一つであるイガイ科のイシマテガイの仲間 *Zelithophaga truncata* は、波打ち際に近い岩棚の中に3cmほどの巣穴を穿孔していました。日本産のイシマテガイ *Lithophaga curta* は食用になるようなので、近縁種の本種も食べられるかと思い、茹でて食べてみましたが、あまり味がなく残念ながら美味ではありませんでした。

Pholadidea suteri Lamy, 1926 (写真2A)

日本のオニカモメガイ、カモメガイに似ていますが、殻後部に殻皮とよばれる皮膜が突出していることで区別できます(ただし、日本のカモメガイにも少し殻皮が突出している個体があります)。また、オニカモメガイより小型で、5cmほどの大きさです。

Pholadidea tridens (Gray, 1843) (写真2B)

日本のカモメガイモドキに似ていますが、表面の彫刻の形状がより粗いことで区別できます。カモメガイモドキは主に木材に穿孔しますが、本種は岩石に穿孔するので、表面がより粗くなっています。殻後部に唇状の1対の付属板があり、殻本体の後端から巣穴の開口部までをつないでいます。2枚の付属板どうしと殻本体は、薄い殻皮で繋がっているだけなので、軟体部が死んだあとは分離しやすくなります。

Barnea (Anchomasa) similis (Gray, 1835) マオリニオガイ (写真2C)

南日本に生息している *Barnea manilensis* オニニオガイ によく似ていますが、殻が厚く、より高さがあります。また、成貝では殻前部だけにやすり状の彫刻があることで区別できます。